さくらの夏

小川きなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらの夏

【Nコード】

N41920

【作者名】

小川きなこ

【あらすじ】

桜の木の言霊を聞くことができる男の子と出会った女の子のはなし。

夏の終わり、十日間だけ咲きほこる不思議な桜を取り巻いたはなし。

流れるように、歌うように、暑苦しく、ミンミンゼミの鳴き声がこの桜の木から溢れている。寒さを乗り越えた暖かい季節に、この大木が見事な花を咲かせることをゼミは知らない。木の根っこが伸びるやわらかい土の下でゼミの幼虫は眠る。桜の花びらが落ちて土となったところに、ようやく成虫となって顔を出し、そのまま、七日間の命はその身が燃え尽きるまで必死に八ネをこすり続ける。自らの住処が桜の木だということも知らずに。

八月下旬の夕方はまだ蒸し暑さが肌にまとわり付いていた。響は少しでもはやく家に着こうと自転車を走らせていた。そのために、止まらない汗を拭うことも、メールを打つために携帯を取り出すことも我慢して漕いできたのだ。なのに、彼を見た瞬間、彼女の足はまるでそれが必然だったかのようにぱったりと動かなくなった。

殺伐とした田舎の風景が彼をさらに際立たせていた。ぱらぱらと一軒家はあるものの、雑草で生い茂った空き地ばかりが周辺に佇み、それらを分断するかのよう真つすぐと続くただ一本の道路。アスファルトはところどころひび割れ、白線は引かれていない。彼は、そんな閑散としたまちはずれに放り込まれた場違いな蛍のように見えた。響は今まで出会った人を出来る限り思い出そうと記憶をたぐり寄せた。だが、誰の姿もその少年とは一致しなかった。

彼は道の真ん中で絵を描いていた。道の外側を見るように胡坐をかき、膝を机代わりにして大きめのクロッキー帳を開いている。す

つと鼻筋の通った横顔が、目にした映像を忠実に再現しようとする真剣だった。そして彼の肩、肘、かがんだ腰、どれも無駄なく筋肉がついているのがシャツ越しにうかがえた。

響は自分の口が開いているのに気付き、慌てて片手で覆った。手を離れた拍子に自転車のバランスが崩れ、急いでもう片方の掌に力を込める。自転車が視界に入っ、響は気がついた。彼が狭い道路を占領しているおかげで自転車の通る場所がないのだ。

どうしよう。話し掛けようか。それとも空き地に乗り上げて避けようか。どうしよう……。。

さんざん迷った挙句、響はごくりと唾をのんだ。

「あの」

響の声にハツとして少年が振り向いた。

「……すみません。気付かなくて」

と、そっけなく会釈をした。流れるような、しっとりした声だ。

横から見た時よりも前髪が長く、それに隠れて表情があまり読み取れない。だが、何故か惹きつけられた。

響は返事を忘れて彼をまじまじと見た。彼の声のようにしっとりした身体つきだった。

「あの……」

「あつ、ごめんなさい」

少年の怪訝そうな声に、響は黙っていた自分に気付き慌てて頭を下げた。

「もう少しで終わるんで」

「大丈夫です。……あの、見てもいいですか？」

え、ああ、と少年は首をかいた。

「……つまらないと思うけど」

「わたし、こうやって絵を描いてる人を見るの、初めてで」

へえ。人事のように言うと、少年は視線を響から外し、元の位置に身体を向けた。それが、別に見ても構わないと言う意味だと響は理解した。

道路と空き地とを隔てる低い石垣に自転車を立てかけると、空地の伸び放題の雑草からむわっと夏の匂いがした。少年はまたクロッキー帳に鉛筆を走らせた。響は気を散らさないよう注意を払って隣に座った。

彼は大木を模写しているようだった。なるほど確かに、彼と向かい合わせの場所に大木はあった。空き地に腰を降ろした木が二人を見下ろしている。だが、それは忘れさられた大木だった。根っこは雑草で隠れて見え、幹はカピカピに乾燥していた。木についたミンミンゼミの鳴き声があまりに元気で、幹がはらりと剥がれてしまいきそうだった。

何となく栄養の行き届いていない印象。これといって特徴があるわけでもない。これを描きうつして何が面白いのだろうか。もっと華やかなものを描いていると思ったのに。と、響は内心思った。

少年は、クセのある短い黒髪だった。日中もここに座っていたのだろうか、少し日焼けした頬に汗が垂れていた。彼が動くとその汗がきらりと舞い、響は息をのんだ。クリスタルのような汗が、音も無く碎け散って、空気へ溶けていく。

響はどきどきしながら彼を見守った。触れると割れてしまいそうな、シャボン玉の汗を彼は流し続けていた。

少年が描き終えたのはそれから数分経ってからだだった。彼はクロッキー帳を手前の地面に置いて絵の全体を眺めると、納得したようにひとつ頷いて、「はい」と響にそれを差し出した。

響は受け取ってその絵をじっくり見た。彼は乾燥した幹の皮一ミリ単位まで、忠実に大木を再現していた。鉛筆色の葉が、クロッキー帳のなかで風に煽られてさみしげに丁寧に揺れていた。

「あの、どうしてこの木を描こうと思ったんですか？」
彼は汗を拭くのをやめて顔を上げた。前髪の奥にある瞳が響を見ている。

「……描けって言うから」

「えっ？」

「描けって言うから」

「誰が？」

「こいつが」

「こいつって、木が、ですか？」

「まあ、うん」

少年は次の響の言葉を待たなかった。立ち上がり大木を一見すると、響に背を向け、夕焼けに照らされた一本道を歩きだした。

彼が足を踏み出したとき、彼の腕からクリスタルの汗が一粒、吸い込まれていくように地面へ落ちた。響の胸が震えた。

「あの、お名前、教えてくれませんか」

と、途切れ途切れに尋ねた。何もなしに別れたら、彼は一本道の彼方へと消えて、そのまま、二度と会えないような気がした。

少年は一度足を止め、振り返ると、その前髪の間から覗く瞳で響をしっかりと捉えた。

「トキワ。上野トキワ」

そう言うと、彼は夕焼け色に光る汗を背負って再び足を踏み出した。

少年がいなくなった目の前の道路は、いつもの見慣れた風景に戻っていた。響はその場に立ったまま、米粒ほどになるまで彼の姿を見続けた。しっとりした彼の声が、響の耳に、いつまでもしつこくこだましていた。

響が、藍子からのメールに気付いたのはその日の夜、眠りにつくころだった。次の日の正午過ぎ、藍子は響のアパートにやってきた。

四世帯が住める二階建ての賃貸アパートは今春に建てられた。まちはずれの何もないところにポツンとあるアパートを藍子はよく気に入っていた。響の家族が引っ越してまだ四ヶ月しか経っていない住居は、至る所に新しい匂いが残っていた。

「新品の教科書の匂いと、木の匂いを混ぜ合わせた感じ」

藍子はアパートに来る度にそう感想を述べて、深呼吸をした。小振りな鼻はアパートの匂いを時間をかけてゆっくり味わっていた。

響が転校してきて最初に仲良くなったのが藍子だった。彼女は、響が自らの教室の席を覚えるよりも前に、誰よりもはやく響に話しかけた。

「蓮沼響ちゃん、だよね」

と、一つひとつを確認するように言い、目尻に皺を寄せて微笑んだ。

「藍子って言います。藍色の藍に子」

「あいこちゃん。可愛い名前だね」

と、響が笑いかけると、藍子の数歩後ろで様子をうかがっていた三人がやってきた。そこから、響は藍子たちと行動を共にすることになった。

まるで、以前も一緒にいたかと錯覚してしまうほど、藍子たちとはすぐに波長が合った。リーダー格の藍子と大人しい奈緒は面白いくらいに正反対の二人だった。学食のカレーライスを頼むと、藍子はルーを残し、奈緒はお米を除けて食べた。雨の日には藍子は黒い

シンプルな傘を差し、奈緒は白いフラワープリントの傘を差した。二人の共通点といえば制服のスカート丈の長さぐらいだった。

逆に充と浩太はよく似ていて、ほとんど見分けがつかなかった。唇の厚さ、髪の毛の分け目、ボタンの開け方、歩き方、言動までもが同じだった。双子ではないと響が知ったのは転校してから一週間後のことだった。見た目は似ていても性格に微妙に違いがあることに響が気付いたのもこの頃だった。充が比較的誰にでも気さくに話しかけるのに対し、浩太は広い友好関係を自ら作るうとはしなかった。

四人とも、転校生の響を快く迎え入れた。転勤族の自覚もあって、引越先で中々友達を作れない響には新鮮な感覚だった。ちぐはぐな四人を響はすぐに好きになった。

「もう、響が全然返信くれないから焦っちゃった」

響の部屋に入るなり、藍子はそう言ってグロスで潤った唇をすばめた。

「余裕を持って昨日の夕方にはメールしたのに」

昨日の夕方。響は昨日の記憶を辿ってみた。上野トキワが、ひび割れたアスファルトに座り込み、生温かい風を受けながらひたすらに干からびた大木を模写している姿が目には浮かんだ。車も人もほとんど通らない忘れ去られた長い長い一本道の真ん中に、どっかり腰をおろしている。今日もあの場所でクリスタルのような汗を流しているのだろうか。しっとりした声が、耳の奥から聞こえてくるようだった。

「さては何かあったんでしょ」
と勘ぐる藍子に、

「まさか、なんにもなかったよ。チャリ漕いでて気付かなかっただけ」

と響は首を振った。

「それより、今日どうしたの？ 着いてから話すって。昨日のこと？」

「まあ、うん……」

と言葉を濁すと、藍子は大きいため息を吐きながら響のチェック柄のベッドに飛び込んだ。スプリングが音を立て、ベッドが不安定に揺れた。

「充の反応どう思う？」

枕に顔を押しつけながら藍子が呟いた。

「どう、って言っても、藍子が一番近くにいたじゃん」

「そうだけど、響から見えてどうだったかってことよ。映画は喜んでくれたけど、それはいつもと変わらない反応だし、あたしと一緒に観れることが嬉しいっていうより、観るチャンスができてラッキーって感じだった」

藍子は顔をさらに押しつけて、枕を強く抱きしめた。やり切れない思いをそこに押しつけるかのようにだった。

昨日、夏休みに入って久しぶりに五人で会った。最近上映が始まった恋愛映画を、地元の小さな映画館で観に行ったのだ。提案したのは藍子だった。真ん中の一番良い座席に充と藍子が並んで座り、その後ろの列に浩太、響、奈緒と座った。藍子が充のことを好きなのは、響が転校してきて間もないころにすぐに分かった。クラスの誰もが分かるほどの藍子の好意に、気付かないのは本人ぐらいだった。

「二人で遊べばいいんじゃないかな。そうすれば少しは充も気付くかも」

と響がカーペットに腰を降ろしながら提案すると、藍子は枕の中で首を振った。

「それは無理。無理よ。二人で遊ぼうなんて言えない。そんな恥ずかしいことするくらいなら、あたし、動物園のカバの歯磨き係になつた方がいい」

普段はクラスでもどこでもみんなを集めて仕切り、何事も先頭をきっていく藍子でも、充を前にすると別人のようだった。充の一挙一動に頬を染め、落胆し、恥じらい、内気な恋する乙女になっていた

た。長い期間定住したことの無い響にはそれがとても新鮮だった。いつも恋をするには日が浅く、友達の恋を応援するには時間が足りなかった。

「カバの歯を磨かなきゃいけないなら、わたしは二人で遊ぶけどなあ……」

「響も好きな人が出来れば、そう思うようになるって」

大丈夫よ、と理不尽な慰めをかけ、藍子は枕を響に投げやった。

皺くちやになった枕のシーツから、藍子のグロスの匂いがほんのり漂っていた。

「夏休みはもう、会えないのかな……」

藍子が何度めかのため息を吐いた。

「三十日に模試で学校に行くから、その時に会えるよ？」

えっ、藍子が声を上げた。

「今日は何日？」

「二十二」

「二十二日、か」

日にちを復唱すると、藍子は頬をほんのり染めて照れくさそうに微笑んだ。恋する顔だった。

「そっか……会えるんだ」

そう言って目を細めた。目の前にいない充の姿を思い浮かべて、あらん限りの愛を壊さないようにそっと、だけでも零さないようにきつく抱きしめていた。藍子をそんな顔にさせる充は幸せ者だ、と響は思った。

その後も藍子の相談は続いた。夏の空が次第に赤みを増していった。遠くの森から蝉が鳴いていた。響は窓際に寄りかかった。黒い点のようなカラスが二羽、夕焼けを横断していった。

藍子の話を聞くのは嫌いじゃなかった。彼女は何がなくともよく喋るので、響が相づちを打てば、それだけで時間はどんどん進んだ。正直、自分が役に立っているとは思えなかったけれど、自分の過ごした一日の裏に、彼女が充を思いながら過ごした一日があったこと

が分かると、響の心はまるやかな幸せに満たされた。

彼女は話すだけ話すと満足して帰っていった。玄関の向こうは、すでに赤みが薄れ一番星が見えていた。

「遅くまでお邪魔しました」

藍子は丁寧な頭を下げた。

「いいって、丁度親もいなかったし。気をつけてね。藍子も女の子なんだから」

と響が言つと、藍子は呆れたように

「こんな何にも無いところなら、百メートル先に人がいればすぐ分かるって」

と笑つた。

「そうね」

「そうよ。じゃあ、また」

「うん。何かあつたら連絡してね」

藍子は蝉の鳴き声に見送られながら、夕日の方へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192o/>

さくらの夏

2010年11月2日19時10分発行